



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	宇都宮輝夫『宗教の見方 人はなぜ信じるのか』（勁草書房、二〇一二年）
Author(s)	山我, 哲雄
Citation	基督教學, 48, 58-62
Issue Date	2013-07-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/62414
Type	other
File Information	09yamaga.pdf



宇都宮輝夫

『宗教の見方』

人はなぜ信じるのか』
(勁草書房、二二〇二二年)

山 我 哲 雄

本書は、著者が北大で毎年繰り返してきた「宗教学概論」の講義を集大成したものである。ただし、一般の宗教の概説書、入門書とは異なり、本書では仏教、キリスト教、イスラームなど各宗教の内容を総覧するようなアプローチは取られず、「宗教とは何か、なぜ人は宗教を信じるのか」「宗教を信じてどうなるのか」といった「本質的」な点を明らかにすることが目指される。

導入的な第一章「宗教の普遍性」では、宗教が「きわめて古い時代から普遍的に存在し続けてきた」ことが確認され、他方で啓蒙主義、科学技術の発展、社会の世俗

化等にもかかわらず、宗教が無用になったり衰退していく予兆はないことが指摘される。

「宗教とは何か…常識を疑い、吟味する」と題された第二章では、まずは副題の通り、宗教を「神への信仰」や、「超自然的なもの」や「奇跡」への信仰、「来世」や「死後の世界」についての信仰と見る「常識的」な通念や、ティリッヒ流の「究極的関心」による定義が、それらに包摂されない具体的事例を挙げることによって、不十分性を指摘される。このように、宗教の多様性と複雑性、その厳密な定義の「不可能性」を示したうえで、筆者は「暫定的な作業仮説」に、さまざまな問題点を孕むことを指摘しながらも「最も汎用性のある定義」として、デュルケムの「宗教とは、神聖な事物、すなわち隔離され禁止された事物に関わる信念と行事との統一的体系である」という定義を採用する。

「宗教概念批判とその吟味」と題された第三章は、定義問題を引き継いだ学問的認識論で、宗教の「本質」を探究する宗教学の基本的方向性を擁護し、特に現在一部に見られる、近代西洋起源の「宗教」概念そのものを廃

棄すべきだという主張に反論する。ただし、他の多くの概念（例えば「哺乳類」）の場合と同様、宗教についてもあらゆる事例に当てはまる完全な普遍性と他の現象には当てはまらない完全な固有性を兼ね備えた定義を構成することは不可能である。そこで著者は、「家族的類似性」という概念を導入する。家族の成員が個々違っていながらも類似性を持つという現象である。それは「互いに重なり合い、交差しあう類似性の網目」であり、「宗教」とは、「こうした諸属性の重なり合うゆるやかな集合体」（六七―六九ページ）であるとする。

第四章は「宗教と非宗教の境界」で、このことは前述のデュルケム流の定義から出発する以上、必然的に問題になる。神聖性が役割を演じるのは必ずしも伝統的な意味での宗教に限られないからである。これについて著者は、基本的に「宗教と非宗教の間そのものにも明確な境界線は引き得ない」という立場をとり、「むしろ現実自体が切れ目のない連続体」であり、完全な宗教と非宗教という「両極の間に無限に多様な現象が切れ目なく並んでいる」（七一ページ）と見る。このような観点から、

共産主義やナチズムのような政治上の主義や「狂信的」な大衆運動、ベラーの言うアメリカの市民宗教にもかなりの程度の「宗教性」が認められる。わが国の社会的道徳運動やアメリカのニュー・ソート運動、ニューエイジ文化、サイエントロジーのような「宗教」を自称しない比較的新しい現象については、著者は「宗教か否かは判断が微妙」としながらも、「消去法で考えると、やはり宗教と見なすべきであろう」（八〇ページ）とする。

第五章は「信じるとはどういうことか」と題し、まず何をどう信じるか、ということの多様性を扱う。特定の宗教の信者かどうかという基準はしばしば曖昧であり、特定の宗教の信者の「信仰の度合い」も「名ばかり」の信者から狂信や原理主義に至るまで「多面的」である。次に著者は、宗教は非合理であり非宗教的な現代人は合理的であるという通念と対決し、行動経済学、「オオカミ少女」や「サブリミナル効果」、「疑似科学」等の例を挙げて、人間がいかに「だまされやす」く、合理的でない行動をしがちであるかを例示する。また、一言で合理性と言っても、「理論的合理性」、「形式的合理性」、「目

の合理性」、「価値合理性」等、多様であり、「合理性」同士が衝突しあう場合があることも指摘される。ここで興味深いのは、著者が仮説的に、認知科学的概念を導入して、宗教を「ヒューリスティクス」の一種と見るものである。それは著者によれば、「取るべき行動を決めるための不完全であるが十分役に立つ便宜的方法」である。「生きていく上でのヒューリスティクスという現実的な基礎があれば、人は宗教を意識の上でも保持していく。宗教のいのちはここにあるように思われる」（九五ページ）と著者は言う。

第六章は「宗教の構成要素」を扱い、著者は多様な要素の「複合体」である宗教を以下の「構成要素」に分けて分析する。(一)「信念」は宗教の意味世界を言葉で表現したもので、神話や教義の形でそれぞれの宗教の神観、世界観、人間観を展開する。(二)「儀礼」は行為を通じて、聖俗の分離、両者の接近や交流、聖による俗世界の意味づけ、贖罪や祈願等を行う。著者は特に、儀礼の「人間同士を接近」させる「社会統合の機能」を重視するが、これはデュルケム流の定義に立つ以上、当然であろう。

(三)「教団」は宗教の集団的側面を表現するが、著者によれば、宗教集団の必然性は、「社会成員が同じ信念と儀礼を共同的に確認する必要性」による。(四)「聖職者」は「専門の宗教家」であり、基本的には宗教的指導で生計を立てている者とする。(五)「生活」は宗教による日常生活の規定で、主として衣食の例が検討される。(六)「体験」では仏陀の「悟り」、ムハンマドの啓示受領、パウロの回心などが紹介されるが、同時に「聖なるもの」を「絶対他者」の体験と見るオットーの聖理解が批判的に考察される。著者によれば、特異な宗教的体験を持つ者は少数に限られ、それでは一般の信徒の平凡な宗教体験を説明できないし、そもそも絶対的に異質なものは認識不可能なはずなのである。

「宗教の機能」を扱う第七章は約四〇ページと最も長く、最も充実している。ここでも著者はまず宗教の機能の多様性を指摘したうえで、宗教がさまざまな「救済」を約束することを挙げ、特に、それを信じるることによって得られる「心理状態」、「心理的補償」を重視する。宗教には此岸的傾向の強い宗教と彼岸的傾向の宗教があ

り、これに応じて救済にも此岸的救済と彼岸的救済が区別されるが、多くの場合、求められるのは「純功利的な期待であり此岸的な幸いであって、地上生活における物質的社会的な苦難からの解放である」という「世界の宗教の実態」が現実的に確認され、彼岸的宗教であっても「此岸的救済が含まれないことは極めてまれ」であることが指摘される。次に、信者の社会層と救済要求の内容との間に相関がある点が注目され、特に抑圧された階層では当然ながら苦難・苦悩からの救済の要求が強く、「自らの善き業に対する報酬を求め、不正な他者への報復を求める願望」が顕著となる。他方で特権階層においては、幸福な状態の理由づけと正当性を求める「幸福の神義論」が中心となる。これに加えて第三のケースとして、主として「知識人」の間に「精神的困窮からの救済」の願望が生じる傾向があることが指摘される。それは「世界と生を意味あるものとして理解したいという欲求」(一四二ページ)に基づく。著者によれば、この「意味づけの機能」は「宗教の最も重要」な機能であり、「世界自体の根拠と根源、目的、意味を説き、その意味ある根源的世

界秩序の中に社会と人間を位置づけることによって、社会と人生に意味と価値を付与する」(一四六ページ)機能である。この章の後半では、この「意味づけの機能」が、「カオスのコスモス化」と「苦難の神義論」の両面からさらに検討され、エリアーデの「祖型と反復」論、ターナーの「コムニタス」論、デュルケムの「宗教と社会」論、バーガーの社会理論等を援用して展開される。結局のところ、著者によれば、宗教が「现实生活にとって必須で決定的な意味」を持つのは、世界と人生が「実際には一定の意味と価値に基づくコスモスとして構成されている」という現実を、宗教が表現しているからである。人間が「世界と人生をコスモスとして受けとめる」ということは、畢竟、「それらを生きるに値するものとして受けとめる」ということなのである(一五七ページ)。その際に、著者は社会の役割を重視する。著者によれば、「社会」とは、「個体と個体、世代と世代が愛着で結び付いた関係性」である。この章ではさらに、宗教の「政治的・社会的機能」として、「政治体制の正当化」(王権神授説等)と「社会制度の正当化」「社会の統合」の機能が扱われる。

付録的な第八章「宗教の諸理論」では、フェスティンガー、ワイトゲンシュタイン、カール・バルト、ルックマン、エリアーデ、デュルケムの宗教理論が紹介され、それぞれの理論の評価と問題点が記される。「人選」がユニークであり、著者の関心の傾向がよく示されている。

極めて広範で多様な主題を扱う書物なので、主たる内容の紹介だけで紙幅がほとんど尽きてしまったが、全体として見た印象は、デュルケムの定義が採用されていることや、ウェーバー、バーガー、ルックマンなどの理論が応用されていることに示されるように、宗教社会学的傾向が顕著であり、「生と死の宗教社会学」の著者の面目躍如といった感がある。これに対し、他の領域に還元され得ぬ宗教固有の特質を探ろうとする宗教現象学的アプローチにはやや懐疑的で、オットーやエリアーデに対する評価は厳しい。オットーの議論が「じつに中途半端」で、「論理的に破綻している」（二二八―九ページ）とか、「エリアーデは自分の言っていることを理解していない」（二二〇ページ）という断言は、やや不穏当か。本書の最後は、社会意識や社会統合から宗教を説明するデュル

ケム流の議論に対する「社会還元主義」との批判に対する反論と、「そのような非難をする者こそ超越主義とか神秘主義者と呼んでしかるべきである」という反批判で結ばれるが、そこでもオットーやエリアーデらの立場が念頭に置かれているのであろう。個々の「見方」に賛否はあるが、刺激と問題提起に富んだ力作である。